

多治見方言における連母音の長母音化について

安 藤 智 子

富山大学人文学部紀要第58号抜刷

2013年2月

多治見方言における連母音の長母音化について

安 藤 智 子

0. 本稿のねらい

連母音 /ai, oi, ui/ 等が日本各地の方言において様々な融合変化を呈することはよく知られている。その中でも、この3種の連母音がすべて第1母音をそのまま伸ばした長母音すなわち [a:, o:, u:] として発音される地域は、国立国語研究所編 (1966-74) 『日本言語地図』などの資料を見る限り、岐阜県が多治見市および土岐市を中心とした地域から愛知県瀬戸市にかけての地域のみである。¹⁾

しかし、共通語における連母音がこの地域においてすべて長音化するとは言えず、共通語などの影響を受けやすい時代にあって誰もが同じ条件で長音化するとも考えられない。そうした中で、この地域の方言を記述しようとする、音韻表記における連母音と長母音の分別の基準が問題になる。そこで、本稿では、この連母音の長音化を特徴とする多治見方言において、各種の連母音がどのような場合に長母音化するかを形態論的、音韻論的に観察することにより、この方言の今後の音韻記述の方針を検討する。

1. 地理的背景

よく知られている牛山 (1953) の東西方言境界線を示す図によれば、岐阜県内部および岐阜県と他県との県境には東日本方言と西日本方言の特徴の境界線が多く走っている。特に、境界線が束になっている富山県と新潟県及び長野県との境に連なる岐阜県北部（飛騨地方）と長野県との間は急峻な山地が続き、方言境界線の束の状態も続いているが、岐阜県南部（美濃地方）では西部の平野部から東部の緩やかな山地にかけて方言境界線の束がほだけている。本稿が対象とする美濃地方は東日本と西日本の特徴が混じり合っているわけである。この美濃地方の中で、東部の東濃地域にあつて中部の中濃地域との境界に接する多治見市は、大都市名古屋との交通の利便性や同じ陶磁器の産地であり隣接する瀬戸市との産業的なつながりから、愛知県西部（尾張地方）の方言の影響も指摘されている（奥村 (1976)、芥子川 (1957) など）。

現在の多治見市の内部では、明治以来さまざまな地区の合併や分離が行われてきた。現在の多治見市は、旧土岐郡の一部と旧可児郡の一部からなっている。土岐川左岸の旧土岐郡に属した多治見町が多治見市（1940年市制施行）の前身で、これが1934年に旧可児郡豊岡町を合併している。さらに1939年に旧可児郡の池田村と小泉村を、1950年に旧可児郡の姫治村（現、姫町ほか）を合併している。旧土岐郡の市之倉村は最終的には1951年に多治見市に編入し、

最近では2006年に市の南東に位置した土岐郡笠原町が編入している。これらの地域の間の方言差と言えるものはほとんど報告されていないと思われる。

現在の多治見市は人口115,488人（2012年10月現在，出典：多治見市役所HP）を抱える東濃地方の中心的都市であり，陶磁器産業や行政，県立高等学校の学区などの関係で，同じく東濃地方西部に属する土岐市・瑞浪市とはとりわけつながりが深い。これらの地域の方言は共通点が多いが，1980年代以降，多治見市の北部および南部は宅地の開発に伴って名古屋通勤圏のベッドタウンとしての側面を持つようになり，東濃地方以外のことばも観察される。

岐阜県の方言についての研究はこれまでにも行われているが，東濃西部については詳細な研究が少ない。奥村（1976）は岐阜県の各地の方言を網羅的に記述しており，東濃地区についても北東部の加子母村を中心に各地についての記述があるが，南西の端にある多治見市に関してはもと可児郡に属していた北部地域のための記述であり，中心部（旧土岐郡多治見町）についての記述がない。そこで，本稿では，今後の東濃地方の方言記述のため，多治見市中心部を中心に音韻表記の基準を定めるための調査を行う。

2. 音声学的・音韻論的背景

2.1 音素体系

初めに結論を言えば，多治見方言の音素の体系は共通語のそれとほぼ一致すると言ってよいと考えられる。

ただし，母音について言えば，音素体系は共通語と同じだが，音声的には無声化の頻度が低いという違いがある。これについて，平山他編著（1997: 15）では岐阜県方言の特色として「母音の無声化は観察されることもあるが，たいして目立たない」との記述がある。また，連母音が融合して1つめの母音を伸ばした長母音のように発音されることが知られているが，母音の後に置いて長母音を形成する拍 /R/ の扱いについては，第5節で検討する。

子音について言えば，筆者の観察では，ガ行鼻濁音は口音のガ行音と弁別的ではないため音素を立てる必要はないし，音声的にもほとんど聞かれない。現れるとすれば撥音の直後に来る（例えば，「団子」[dango] ～ [danŋo]）程度である。代わりに母音の後では有声軟口蓋破裂音とともに有声軟口蓋摩擦音がよく聞かれる。しかし，これについて，平山他編著（1997: 17）は岐阜県について「語中・語尾のガ行子音に鼻濁音はあるが，高山市・大垣市などでしばしば有声破裂音 [g]，飛騨白川郷で [ŋg] で発音されることがあり，語頭のガ行子音との区別がはっきりしない場合がある」と述べおり，多治見市でどうであるのかは明示されていない。また，国立国語研究所編（1966-74）『日本言語地図』を見ると，岐阜県のほとんどで語頭を除くガ行子音の鼻音化があり，東濃地方南東部でのみ愛知県の大部分を占める非鼻音の地域に連なって有声軟口蓋破裂音とともに有声軟口蓋摩擦音が現れているが，多治見市近辺は当該項目の調査地点

に入っていないため、こちらも筆者の観察を裏付けるものではない。今後の調査がまたれる点である。

このほかにも、語彙的にはヒチ「七」、ムラウ「もらう」などの共通語との違い（訛）が見られるが、個別的であるため音韻体系の相違とは見做されない。

なお、東濃方言でも共通語と同様に、チ、ツの子音音素 /c/ はタ、チ、ツ、テ、トのみを記述するなら破裂音と破擦音を含むタ行子音を /t/ の 1 音素にまとめる方針もありうるが、ここでは「エーキツァ（＝英吉（人名）さん）」「ゴツツォー（＝御馳走）」などに現れるツァ・ツォ音を表すのにも /c/ が有用であるため、無声破擦音を実態とする音素として /c/ を立て、破裂音 /t/ と区別することにする。すなわち、タ、テ、ト /ta, te, to/, ツァ、チ、ツ等は /ca, ci, cu/ とする。また、チャ、チュ、チョは /cja, cju, cjo/ によって表す。一方、タ行以外の行の子音は単一の子音音素を持つものとし、例えばサ行は /sa, si, su, se, so/, シャ・シュ・ショは /sja, sju, sjo/ とする。

以上のことから、多治見方言の記述にあたって用いる音素表記を仮に(1)のとおりとする。

(1) 多治見方言の音素体系（仮）

母音：/i/, /e/, /a/, /o/, /u/

子音：/p, t, k, b, d, g, s, h, z, c, m, n, r, w, j/

特殊音素：/Q, N, R/

ただし、本稿の以下の記述は音素表記の妥当性を検討するための過程として、カタカナで表記を行う。

2.2 アクセント

岐阜県は、南西部の京阪式アクセントあるいは垂井式アクセントを持つ限られた地域を除き、ほとんどの地域が内輪東京式アクセントを持つとされるが、東美濃地方の南東部（恵那市南部・中津川市南部）は東京と同じ中輪東京式とされる。山口（2003）は同書 39 ページの「東海地方の[垂井式（近隣式）＝内輪式－中輪式－外輪式]移行制配置図」（山口（1984: 8）より転用）では多治見市の辺りを内輪式としているが、巻末の「全国方言アクセント区分図」では内輪式に入れており、「東濃は近年内輪式アクセント（1 拍名詞 2 類語が語によって○→○ㇿ）の傾向が強まっている。」と述べている。東京と同じ中輪式ではなく京阪地域からの影響の濃い内輪式の傾向が強まっていることは、内輪式の名古屋方面からの影響も考えられる。

一方、奥村（1976）は東濃地方のアクセントの特徴として、1 拍二類名詞「名・葉・日・矢」が有核になることに加えて、東京で頭高型の疑問詞「なに・いつ」等が平板型になること、3 拍五類名詞に含まれる和語「涙・命・姿・火箸」に加えて「砂糖・景色・悪魔・世界・覚悟・

ざくろ・彼岸・座禅」について、東京で頭高型であるのに対してこの地方では高齢層を中心に中高型となることを示している。

内輪式と中輪式の違いは、1拍名詞二類が前者では三類と同じく有核、後者では一類と同じく無核となるという点のほか、一部の動詞および形容詞の型の相違にもある。筆者の観察でも、奥村(1976)の指摘する点以外に、2～3拍名詞や動詞に多数の個別的な東京方言との相違があり、形容詞は内輪式の特徴を示してほとんど起伏式であると見られるが、詳細は稿を改めたい。また、イントネーションの項目で論じられることもあるが、ピッチの遅上がりが顕著である。尾張方言の遅上がりについては水谷(1960a, b)等の報告があるが、多治見方言での実態についてはこれも稿を改めて論じる予定である。

2.3 イントネーション

多治見方言の文末のイントネーションに例えば次のような特徴的な例が観察されるが、モダリティと関わるテーマとして、これも詳細は稿を改めて論じたい。

(2) モダリティ表現に関わるイントネーションの特徴

- ・ドコイッタヤ（下降）「どこに行ったのか？」
- ・ヨバレルヨ（下降）「ごちそうになったら？」
- ・ホリャアカンワ、ネエ（下降上昇）「それはだめだよね」

2.4 インテンシティ

多治見方言において程度強調する際の方法が東京方言などと異なる場合がある。

形容詞の程度強調の際、東京方言では語幹末の母音が伸ばされることがある（例えば、「甘い」をアマーイとする等）が、多治見方言では普通の程度でもその母音が伸ばされる（例えば、アマー）ため、程度強調にこの方法を用いることができない。そこで、2拍目の子音の前に促音（あるいは鼻音の場合は撥音も）を挿入する方法（例えば、アッマー [aʔma:] あるいはアンマー [am:ma:]）が多用される。これは東京方言でもタッカ（一）イ、スッゴ（一）イなどの形で生じることがあるが、多治見方言では2拍目の子音が鼻音や接近音（例えば、ヨッワー [joywa:] 「弱い」）、流音（例えば、カッラー [kalla:] ～ [kaʔ:ʔda:] 「辛い」）であっても頻繁に生じる。2拍目に子音がない場合は促音が入りようがないが、それでも拍の長さとしては1拍目が2拍程度の長さに伸び（例えば、トーオー [to:ɔ:] （＝遠い））、ピッチの変化や強さといったプロソディの面では促音挿入の場合と同様の変化をもって程度強調を表す。

形容詞以外でも、バッカナ「馬鹿な、ひどい」、アッカスカ「だめじゃないか（アカン＝いけない・だめだ、～スカ＝（～ない）に決まっている）」などの例が多治見ことば編集委員会

編著 (1975: 23) に見られ、促音化が多いことが指摘されている。

3. 母音連続の長母音化の条件

連母音が融合する条件として、話者の属性や発話の場面などの社会言語学的な条件が関わってくることは確実だが、これを除けば、前後の母音の種類 (3.1)、連母音が現れる形態論的環境 (3.2)、連母音の前後の音韻的環境 (3.3) が考えられる。本節では、次の2つの方法でそれぞれの条件について検討する。

1) 以下の多治見方言の語彙集における表記において、連母音の長母音化および連母音としての記述から、長母音化する母音の組み合わせを列挙する。

多治見ことば編集委員会編著 (1975) 『多治見のことば』 (第2版, 多治見市教育研究所発行) の pp. 45-113 「付 多治見方言集」 (以下, 『多治見方言』)

多治見青年会議所 (社) 元勤進 (1996) 「多治見弁」 (多治見市教員研究所・(社) 多治見青年会議所四拾周年記念事業として作成された方言語彙の番付表) (以下, 「番付表」)

土屋千春 (多治見市教育研究所) 編 (1957) 『多治見を中心とした土岐方言集』 多治見市教育研究所 (以下, 『土岐方言』)

2) 多治見方言の話者に対し、面接で調査語の発音を依頼し、長母音化するか否かの意識調査を合わせて行う。

1) については、共通語で連母音を含む語彙が、例えば「あかあ」(＝赤い) のように長母音を示す平仮名で書かれている場合もあれば、「かいぎり」(＝貝殻) のように連母音を示す平仮名で書かれている場合もあり、また、「おそがあ」(＝恐い) という見出しに「おそがい、も同義」と書き添えてあるものもある (下線は筆者による)。語彙集の記述方針が明確に示されていないため、これらが意図的に区別されているのかどうか明らかなではないが、「～も同義」等の記述や共通語あるいは周辺の方言との対応から連母音が基にあると考えられるものについて、長母音を示す記述がある場合とない場合を分析する。

多治見方言の俚言に関しては、今後の収集と使用や理解に関する調査が必要であるが、ここで挙げた語彙集はその手掛かりとなるものである。しかし、語彙集に見られる仮名表記がどこまで音声の実体や言語意識を反映しているものであるかが明らかなでない以上、今後どのようにそれを利用していくかを検討するために、表記の分析を先行研究や今回の2) の調査と照らし合わせる作業が必要となる。

なお、語彙集から採集した語の共通語訳は主として収録語数の多い『多治見方言』を参考に、以下、鉤括弧に入れて記すが、必要に応じて音韻的に対応する共通語 (古語を含む) あるいは

岐阜県内他地域の語形や説明を丸括弧に入れて添える。

2) については、敢えて話者の属性の違いなどでなく音韻論的・形態論的条件を検討するため、全員旧多治見町の多治見市立養正小学校校区内で言語形成期を過ごし、現在も同校区内に居住する60歳代の多治見方言話者を対象とし、発音および意識調査を行った。インフォーマントは表1のとおりである。²⁾ なお、表には示していないが、全員の両親の一方が多治見市内の出身であり、もう一方は多治見市を除く美濃地方内の出身であった。

表1 面接調査インフォーマントの属性

インフォーマント	生年	性別	生育地	外住歴	職業 (退職後を含む)
A氏	1948年	女性	上町	18～20歳, 25～30歳 (計7年)	陶磁器産業
B氏	1949年	男性	上町	なし	陶磁器産業
C氏	1949年	男性	平野町	なし	公務員
D氏	1950年	女性	生田町	20～21歳 (半年間)	陶磁器産業
E氏	1951年	女性	錦町	なし	自営業
F氏	1952年	女性	上町	25～28歳, 32～37歳 (計8年)	陶磁器産業

面接調査では、発音が文字表記に影響されることのないように、ノート型PCの画面上でMicrosoftのPowerPointによって表示されたイラストや写真等を見て答える形式をとった。図示しにくい検査語など、部分的にはクイズ形式で答えてもらうものも用意した。ただし、同じものを見てインフォーマントにより異なる俚言が用いられることにより、調査の目的から外れた語が発せられることを防ぐため、検査語には連母音の発音以外に俚言などの方言的特徴が出にくいと予測されるものを選んだ。また、そのことにより、発音の際に方言コードでの発音が出にくくなることが予測されたため、連母音としての発音をした場合に、長母音での発音をすることがあるかどうかを尋ねるとい言語意識調査を併せて行った。

面接調査における音声は、インフォーマントの同意を得たうえで、ICレコーダー（Roland社EDIROL R-09）とマイクロフォン（SONY社ECM-PCV800U）を用いて録音を行い、フリーソフトであるSIL Speech Analyzerにより音響分析を行った。

3.1 長母音化が生じる母音の組み合わせ

本節ではまず、多治見市近辺における連母音の長音化に関する先行研究から長音化する可能性のある連母音の組み合わせを選定した上で、その各組み合わせについて方言語彙集の表記と面接調査の結果を分析し、さらに先行研究で触れられていない母音の組み合わせについて語彙集の表記から考えられることをまとめる。

なお、音韻体系の記述方針が確定していないことから、本稿で取り扱う連母音については、共通語や他地域の方言において2つの異なる母音の連鎖として現れるものを、音素レベルの仮の表現として「連母音 ai・oi・ui」などと書き表すことにする。また、[a:], [o:], [u:]([u:])のような第一母音をそのまま延長した音を長母音あるいは長音化した発音と呼び、西濃地方や尾張地方について指摘されている [æ:], [ɛ:] (<連母音 ai) などの第一母音、第二母音が共に変化した音を融合母音、[ai], [oi] などの発音を母音連鎖と呼ぶことにする（ただし、引用箇所についてはこの限りではない）。

まず、先行研究を概観する。

奥村 (1976: 259) は特に例を挙げず、次のように記している。

東美濃地方は一般に、連母音 ai・oi・ui 等の融合変化が著しいと言われているが、しかし、恵那市・中津川市・恵那郡・加茂郡などにおける連母音の変化は余り著しくない。特にそれが著しいのは、多治見市・土岐市・瑞浪市・可児市あたりの地域、つまり東美濃西部である。この地域では、ai・oi・ui 連母音が殆ど融合変化を起して、a:・o:・u: の如く発音される。

また、平山他編著 (1997: 40) は、次のように述べている。

美濃東南部の可児市東部から可児郡御嵩町、加茂郡八百津町の一部、多治見市、土岐市、瑞浪市、土岐郡笠原町あたりにかけて、連母音「アイ」「オイ」「ウイ」などが「アー」「オー」「ウー」に融合変化する。例えば、「毎年」が「マートシ」「赤い」が「アカー」「遠いところ」が「トオートコ」となる。この融合変化は県境をはさんで南に接する愛知県瀬戸市に連続している。

ai・oi・ui の3つの連母音については、椋山女学園大学方言研究グループ (1979) の調査報告書においても「ガイロ (蛙)・貝・財布・大工・大根・薩摩芋・モチマイ (糯米)・酸っぱい・甘い・塩辛い・焦げ臭い・くすぐったい・イカイ (大きい)・マイマイ (旋毛)・挨拶」における ai, 「ヒドロイ (眩しい)・匂い」における oi, 「ウスイ (塩味が薄い)・スイ (酸っぱい)」における ui として記述があり、多治見では「ガーロ」, 「ヒドロー」, 「ウスー」等の表記によりほとんど長音化していることが示されている。このうち、「薩摩芋」は連母音の中間に形態素境界があるにもかかわらず長音化している点が興味深い。³⁾

椋山女学園大学方言研究グループ (1979) の調査に携わった太田 (1979) の記述によれば、多治見市三の倉町⁴⁾ の明治42年生まれの男性は ai に関する17の調査項目のうち5項目で融合母

音 [æ:] を使用するが、残りの12項目では長母音 [a:] を使用しており、多治見市内の他の地域では母音連鎖 [ai] が少数見られるほかはすべて長母音 [a:] である。

以上の先行研究では多治見市などの東濃地方西部を中心とした地域において3種の連母音の長音化が記述されているが、この他に、中濃～西濃地方と尾張地方については、連母音 ae が融合するとの記述が見られる（平山他編著 1997: 34, 37 など）。奥村（1976: 179）は西濃地方での ae の [æ:] への融合について「名前・蠅・蛙・帰る・子供でさえ」の例を挙げているが、「ai 連母音が、多くの場合、右の変化を起こすのに対し、ae 連母音は、そのような融合長音化を起こさない語がある程度存する」とし、融合変化を起こさない例として「苗（ナエ）・備（ソナ）える」を挙げている。また、以下(3.1.4.1)で見るようにこの地域の方言語彙集においてもデングリガアル「でんぐり返る」など少数ではあるが連母音 ae が長音化していることを示す表記が見られる。

そこで、まず ai・oi・ui および ae の4つの連母音について、多治見方言における長音化の調査を行った。

3.1.1 連母音 ai

3.1.1.1 連母音 ai の方言語彙集における表記

初めに、方言語彙集においてア段＋イの表記を持つ語に加えて、対応する共通語（古語を含む）および岐阜県内の他の方言あるいは隣接する尾張方言において連母音 ai を含む語が、多治見方言の語彙集においてどのように表記されているかを整理する。ここで用いた語彙集は上記の3種であるが、語彙集ではすべて平仮名で表記されたものをここでは片仮名に置き換えている。(3) では形容詞終止形の末尾に連母音 ai を持つ語を a、動詞活用する語を b、その他の語（名詞・副詞など）を c と区分して示す。その各区分の中で、上記の語彙集において①にア段文字＋イのみの表記が見られたもの、②にア段文字＋アの表記によりア段長音を示すと考えられるもの、そして③に①と②の両方の表記が見られるものを挙げる。なお、それぞれにおいて語末部分が同じ要素を持つ語は { } によってまとめて記す。また、各語につき複数の語形が挙げられている場合には、記号「～」を挟んですべて記すこととする。以上の記載方針は、他の母音の組み合わせについても特記しない限り同様である。また、1語に複数の連母音が含まれる場合は、複数の項に重複して記載する。

(3) 連母音 ai を含む語の方言語彙集における表記

a. 形容詞末尾

① ア段＋イ

キツネクサイ「寂しい」・キャバタイ「けちくさい」・トコナイ「異存がない」・ヒヤイ「危

ない」・ヤラカイ「柔らかい」(5語)

②ア段+ア

アカア「赤い」・ウマア「(1)美味だ, (2)上手だ, (3)都合が良い」・キイナア〜キナア「黄色い」・クラア「暗い」・スケナア「少ない」・セバア「狭い」・タカア〜タッカア「高い」・チョロナガア「細長い」・ドエラア「大変な」・ババア「汚い」・ヒヨロナガア「細長い」・ボサア「むさくるしい」・メレタア「めでたい」・モサア「(1)悪い, (2)粗雑な」・{アホ-「ばからしい」・ケチ-「けちな」・タル-「つまらない」・トロ-「愚かな」・ヘボ-「弱い, 下手くそ」・ムサ-「(1)汚い, (2)みすばらしい」・メンド-「面倒な」・モエ-「ききな臭い」}・クサア・{チンピ-「小さい」・ニス-「(1)鈍い, (2)意気地がない」・ヒラ-「平たい」・マアル〜マル-「丸い」}・クタア・{オモ〜ヨモ-「重い」・クスベ〜コソベ-「くすぐったい」・ケブ-「煙たい」・ツベ-「冷たい」・ネブ〜ネム-「眠い」}・タア・{アモスモ-「あつという間もない」・アラケ-「乱暴な」・イワンコッチャ-「それ見たことか」・カスデモ-「無益な」・カンカ-「仕方がない」・シャシャモ-「とんでもない」・ジョサ-「如才ない」・ズツ-「つらい」・ゾウサ〜ゾウソ-「容易な」・タイモ〜タアモ-「とんでもない(体もない)」・ドウモ-「なんともない」・ドッタ-「なんともない」・ハリガエガ-「張り合いがない」・フンベツ〜フンベツァ-「分別がない」・ヤクタアモ-「むちゃくちゃな」・ラッシモ-「乱雑な」}・ナア (47語)

③=①・②併記

アムナイ〜アムナア「危ない」・イカイ〜イカア「大きい」・エライ〜エラア「(1)偉い, (2)苦しい, (3)大変な」・オソガイ〜オソガア「怖い」・ヌクタイ〜ヌクタア「温かい」・{ウマ-「都合が良い」・ゴツ-「ごつい」・ミズ-「(1)他人行儀な, (2)水っぽい」}・クサイ〜クサア・{シャ〜シヨ〜シャ〜シヨ-「仕方がない」・ズクガ-「元気がない」}・ナイ〜ナア・(10語)

b. 動詞

①ア段+イ

クンサイ「ください」・セエダイテ「精を出して」・ダイタゲル(下記参照)・ダイタル(下記参照) (4語)

②ア段+ア

カアトクレ(下記参照)・クウタア「食いたい」・チョオダアス「くださる(頂戴)」・チョオダアヘンカヤ「くださいますか(頂戴)」・ナガアタル「流してやる」・ハアリャヘン「入らない」・ハアル「入る」・{カア- (下記参照)・チョオダア-「くださった(頂戴)」・ハア-「(1)入った, (2)掃いた」・ヤットク-ナア-「やってくださった」}・タ・{オキ-「(1)やめなさい, (2)置きなさい」・クウ-「食べなさい」・セ〜シ-「しなさい」}・ナア・{イ

カ〜イコ-「行こう」・オカ〜オコ-「やめよう」・ヤロ-「やろう」-マア〜マアカ（17語）

③=①・②併記

{オク-ナイ〜オク-ナア-「くださった」・ナイ〜ナア-「泣いた」・ナガイ〜ナガア-「流した」・ハナイ〜ハナア-「(1)話した, (2)離れた」・フヤイ〜フヤア-「増やした」}-タ・{カワカイ〜カワカア-「乾かして」・マイ〜マア〜マエ-「仲間に入れてください」}-テ・{イキ-「行きなさい」・オコ〜オク〜オクン-「ください」}-ナイ〜ナア・{ウタオ〜ウタワ-「歌おう」・ミヨ-「見よう」}-マイカ〜マアカ（11語）

c. その他

①ア段+イ

イッパイコ「いっぱい」・オシマイヤス「さようなら」・オタバイ「大事にすること（たばう）」・カイギリ「貝殻」・カイクレ「少しも（搔暮）」・カイヨウビ「火曜日」⁵⁾・カスワライ「おもしろくないのに笑うこと」・カマイタチ「鎌鼬」・コチガイ「衝突」・コッパイ「難儀（骨灰）」・コンドカイシ〜コンドカイリ「今度は」・ダイドコ「台所」・タダイモ「里芋」・チャイロオ「茶色い」（14語）

②ア段+ア

アアマニ「合間に」・アンバア「按配」・エエバア「良い按配」・オダアジン「大尽」・カアド「街道」・カアドバタ「街道端」・カナダラア「金盥」・キョウラア「今日あたり（向來?）」・ゴタアゲ「御苦労（大儀）」・コナアダ「この間」・サアガ「…と（サイガ）」・ゾンガア「意外に（存外）」・タアガアタアガア「適当に（大概）」・タアゲ「苦労（大儀）」・タアダア「わざわざ（タイダイ）」・ダアツウサン「派手者（大通）」・タラア「盥」・ハア「(1)もう, 既に, (2)灰」・マアトシ「毎年」・{イイ-「言い合い」・クミ-「組合」・シ-「試合」・ツカメ-「つかみ合い」・ノリ-「乗合」・ヘシ-「押し合い（へし合い）」・ボオ-「鬼ごっこ（追い合い）」・ミ-「見合い」・モウ-「共有（モーヤイ）」・ヨリ-「寄り合い」}-ヤア（29語）

③=①・②併記

アイマ〜アイサマ〜アアマ〜アアサマ〜アワイサ「間」・アイマチ〜アアマチ「あやまち」・アライマアシ〜アラアマアシ〜アライマシ〜アラアマシ「洗い片付け」・オナイドシ〜オナアドシ「同年齢」・ガイキ〜ガアキ「風邪（咳気）」・カイモチ〜カアモチ「おはぎ」・キチキチイッパイ〜キチキチニイッパア「びっしりといっぱいに」・グワイ〜グワア「具合」・コウザイ〜コウザア「わがまま」・コウライキビ〜コウラアキビ〜コウラア「とうもろこし」・コウライバサミ〜コウラアバサミ「植木ばさみ」・ザイ〜ザア「はたき」・シバイ〜シバア「芝居」・シマイ〜シマア「終わり」・セエリキイッパイ〜セエリキイッパア「精一杯」・ダイコ〜ダアコ「大根」・ダイツウ〜ダアツウ「派手なこと」・タイモナア〜タアモナア「とんでもない（体もない）」・ドダイ〜ドダア「まるで」・ハ

スカイ～ハスカア「斜め」・フタイ～フタア「ひたい」・ヤイト～ヤアト「灸」(22語)

(3a)の形容詞末尾を見ると、アカア・ウマア・クサア・クラアのように長母音化する以外の点では形態・意味ともに共通語と変わらない語については、②のア段長音を示す表記が行われている。これは、長音化するという音声的特徴こそが方言的語彙として採録すべき特徴であるためであろう。逆に言えば、キツネクサイ、キャバタイのような俚言らしい語彙はア段＋イで書かれていても方言的語彙として採録できるわけであるので、音声的特徴の表し方に注意が向けられていないということも考えられる。

(3b)の動詞には、終止形のみならず、タ形・テ形・勧誘の助動詞(-マイ～マア)あるいは尊敬の助動詞(-ナイ～ナア)を持つものが含まれている。勧誘の助動詞(-マイ～マア)と尊敬の助動詞(-ナイ～ナア)はその助動詞の部分が連母音aiあるいはア段長音を持つ。共通語の語幹に当たる部分に連母音aiがある語は、①のダイタゲル「(1)抱いてあげる」、ダイタル「(1)抱いてやる」、②のカアタ「(1)書いた、(2)掻いた」、カアトクレ「(1)書いてくれ、(2)掻いてくれ」、チョウダアス「くださる」およびその活用形、ハアタ「(1)入った、(2)掃いた」、ハアリヤヘン「入らない」、ハアル「入る」、③のナイト～ナアタ「泣いた」である。ただし、カアタとカアトクレ、ダイタゲルとダイタルはそれぞれ「(3)貸した」「(3)貸してくれ」、「(2)出してあげる」「(2)出してやる」の意味も持つ。「貸す」「出す」のようなサ行五段活用動詞のタ形・テ形は西濃方言や尾張方言においてカイタ、カイテ、ダイタ、ダイテのようにイ音便化し、さらに連母音aiが融合する現象が知られているが、多治見方言の語彙集ではカアタのようにア段長音として記述されている例があるわけである。このようなサ行五段活用動詞の音便化した例は、他に①のセエダイテ、②のナガアタル、③のカワカイテ～カワカアテ、ナガイタ～ナガアタ・ハナイト～ハナアタ、フヤिता～フヤアタが掲載されている。

なお、マイテ～マアテ～マエテ「仲間に入れてください」は「混ぜる」との関連も考えられるが⁶⁾、筆者の語感では子供の集団遊びにおけるマイテ「仲間に入れてください」、マアテムラヤ「仲間に入れてもらいなさい」、マイタゲル「仲間に入れてあげる」のようなテ形あるいはその変形でしか用いられず、終止形が用いられないため音便の元の形態が不明である。

(3c)には名詞・副詞・形容詞語幹(チャイロオ)・挨拶(オシマイヤス)・接辞(サアガ)といった語彙が含まれる。語源未詳のものも少なくないが、語種も和語(①カイギリ、②アアマニ、③オナイドシ～オナアドシなど)も漢語(①コッパイ、②アンバア、③ガイキ～ガアキなど)も含まれる。和語には動詞由来名詞(①オタバイ、②イイヤア、③アライマアシ～アラアマアシ～アライマシ～アラアマシなど)も含まれる。このようなア(ワ)行五段活用動詞の連用形活用語尾に由来するイ(>ア)を除き、形態素分析できる範囲で言えば、連母音の間に形態素境界が来る例は①のカマイタチ、タダイモおよびチャイロオと、③のシバイ～シバアのみ

である。

以上の観察から、語彙集における連母音aiを含む語の表記は、独特な俚言であるかどうかや形態素境界が関わっている可能性があり、また、同じ形態素を含む語でも語によって、あるいは活用形によって表記が異なっていることがあり、必ずしも発音を正確に表していない可能性があると考えられる。語彙集を個別に見ると、先に出版された『土岐方言』は『多治見方言』に比べて同じ形態素が異なる表記になっている場合が多く見られ、『土岐方言』の掲載語のほとんどを採録した『多治見方言』はその点を部分的に修正して統一する方向で書かれている。それでも、『多治見方言』においてもやはり不統一な点は認められ、それが本当に発音の違いを反映しているかどうかは定かではない。

3.1.1.2 面接調査における連母音 ai

表2は、インフォーマントA～Fの各氏を対象とした調査結果を示したものである。各セルに「ai」の標示のみの場合は母音連鎖として、「aa」のみの場合はア段長音として発音されたことを示す。インフォーマントが母音連鎖として発音した場合に調査者がア段長音を用いて発音し、「○○と言うことはありますか」と尋ねて「○○とも言う」との回答があった場合は「ai>aa」とし、「今は言わないが昔は○○とも言った」との回答があった場合は「ai, 昔 aa」, 「自分は言わないがこの辺りでは○○と言う人もいる」という主旨の回答があった場合は「ai, 聞 aa」, 「自分は言わないが、自分より上の世代の人は○○とも言う」という主旨の回答があった場合は「ai, 老 aa」とした。そのうえで、インフォーマント本人がア段長音として発音することがないと見做される「ai」および「ai, 聞 aa」「ai, 老 aa」を網掛けにしている。

インフォーマントのうちD氏は、他の母音の組み合わせを含め、連母音を長音化することがほとんどなかったが、他のインフォーマントは語によって長音化する場合としない場合があった。表1からはD氏が特に他のインフォーマントに比べて共通語化している理由は見当たらず、D氏は調査前の会話で「自分は共通語で話していると思っていたが、他所に行った人からは地元の訛りがあって懐かしいと言われたことがある」と述べていた。実際、連母音の発音以外の点（アクセント・子音の発音など）では多治見方言の特徴が観察されたことから、D氏は多治見方言話者であると考えられるが、その中でも連母音には個人により発音の差あるいは意識の差があることが窺われる。

D氏以外にも個人差は認められるが、全体としてみると、形容詞および動詞の連母音は長音化の割合が高いようである。一方名詞は、2拍語「鯛」および漢語「階段」、外来語「タイル」「タイヤ」「ワイン」で長音化が少ない。和製漢語「大根」はインフォーマント各氏がダイコやダアコとも言うと言っており、方言語彙集にも語末の撥音が脱落した形が見られる。

外来語「ネクタイ」は母音連鎖3名、長母音として発音しうる人が2名、短母音1名である

が、ネクタイを用いるであろう男性のB氏およびC氏に長音化が見られるのが興味深い。また、形態素境界を含む「薩摩芋」は前節で見たタダイモ「里芋（只芋）」が表記にイを含むのと対照的に、長音化の発音が多く観察された。

表2 面接調査における連母音 ai の発音

ai	A	B	C	D	E	F
鯛	ai	ai	ai	ai	ai	ai
お参り	ai>aa	ai>aa	aa	ai	ai>aa	aa
大根	ai>aa	ai>aa	ai>aa	ai	ai	ai, 昔 aa
階段	ai	ai	ai, 昔 aa	ai	ai	ai, 昔 aa
タイル	ai	ai	ai, 昔 aa	ai	ai	ai
タイヤ	ai	ai	ai	ai	ai	ai
ネクタイ	ai, 老 aa	ai>aa	aa	ai	ai	a
ワイン	ai	ai	ai	ai	ai	ai
薩摩芋	ai>aa	ai>aa	aa	ai	ai	ai, 昔 aa
甘い	ai>aa	aa	aa	ai, 聞 aa	aa	aa
書いた	ai>aa	aa	aa	ai	ai	aa
泣いた	ai>aa	aa	aa	ai, 聞 aa	aa	aa
出した	aa	aa	aa	asi, 聞 aa	aa	aa
入る	ai>aa	aa	aa	ai	ai	ai>aa

3.1.2 連母音 oi

3.1.2.1 方言語彙集における連母音 oi の表記

本節では、方言語彙集においてオ段＋イの表記を持つ語に加えて、対応する共通語（古語を含む）および岐阜県内の他の方言あるいは隣接する尾張方言において連母音 oi を含む語が、多治見方言の語彙集においてどのように表記されているかを整理する。(4)では、上記の語彙集において①オ段文字＋イのみの表記が見られたもの、②オ段＋オまたはオ段＋ウの表記によりオ段長音を示すと考えられるもの、そして③に①と②の両方の表記が見られるものを区分している。ただし、②と③について、『多治見方言』『土岐方言』ではオ段長音とみられる部分をオ段＋ウと表記しているのに対し、「番付表」ではオ段＋オと表記しており、食い違いが見られる。(4)ではこれらの語彙集におけるオ段長音と見られる表記ををオ段＋オに統一して記載する。

(4) 連母音 oi を含む語の方言語彙集における表記

a. 形容詞末尾

①オ段＋イ

アママッチョロイ「思慮が浅い（甘ちよろい）」・ヌクトイ「温かい」・ブトイ「太い」・マ

ドロイ「遅鈍な」・メンドイ「面倒な」・{キタナッ-「汚い」・ジャケラ-「つまらない」・ムサラ-「不潔な」・ムセッ-「(1)うるさい, (2)むせっぽい」・ヤニ-「しつこい」・ヤワ-「柔らかい」} -コイ (11語)

②オ段+オ

エガラッポオ「えぐい」・オモオ～ヨモオ「重い」・キイロオ「黄色い」・コウトオ「つましい」・チャイロオ「茶色い」・チョロオ「遅愚な」・トロオ「愚かな」・ナガヒョロオ「細長い」・ヘボオ「弱い」・マンマルコオ「真丸い」・ムゴオ「かわいそうな」 (11語)

③=①・②併記

エゴイ～エゴオ「えぐい」・エゾイ～エゾオ「小動物が群がって嫌になるほどの」・オゾイ～オゾオ「粗悪な」・キモイ～キモオ「窮屈な」・ツモイ～ツモオ「窮屈な」・ヒドロイ～ヒドロオ～ヒドロ (ッ) コイ～ヒドロ (ッ) コオ「まぶしい」 (6語)

b. 動詞

①オ段+イ

オイデヤス「いらっしゃい」・ドイトレ「どいている」 (2語)

②オ段+オ

ビックリコオタ「びっくりした (びっくり+こいた)」 (1語)

③=①・②併記

オイデル～オオデル～オイデヤアス「いらっしゃる」・オイデン～オオデン「いらっしゃらない」・ボイダス～ボオダス「追い出す」・ボイツク～ボオツク「追いつく」・{オイ～オオ-「やめた」・オイデ～オオデ-「いらっしゃった」・オトイ～オトオ-「落とした」}-タ (7語)

c. その他

①オ段+イ

オヒロイ「徒歩 (御拾い)」・ソイカラ「それから」・ソイダケ「それだけ」・ソイデ「それで」 (4語)

②オ段+オ

コオ「鯉」・コオツ「こいつ, これ」・コオツラア～コオツンタア「こいつら, これら」・ボオヤア「鬼ごっこ (追い合い)」 (4語)

③=①・②併記

ホイツ～ハウツ「そいつ」 (1語)

(4a)の形容詞末尾を見ると, (3a)の場合と同様に, エガラッポオ, オモオ～ヨモオ, キイロオ, チャイロオ, ムゴオといった共通語と意味も形態もほとんど変わらない語の多くが②の表記と

なっている。①のアマッチョロイなども共通語と変わらないと考えて良いと思われるが、これがなぜ方言語彙集に掲載されているか不明である。

(4b)の動詞を見ると、尊敬語のオイデル～オオデルとその活用形が③の表記を中心に多く挙げられている。そのうちオイデヤスのみが①の表記となっており、これを唯一掲載している『土岐方言』には語釈が「(1)おいでなさい、(2)いらっしゃい」と記されているが、筆者の語感では関西風の挨拶ことばであって、日常的な動詞とは考えられない。

また、①のドイトレ、②のビックリコオタ、③のオイタ～オオタはそれぞれ力行五段動詞ドク「どく」、～コク「(複合サ変動詞としての)～する[卑語]」、オク「やめる」のテ形もしくはタ形であるが、表記は3通りにわたっている。一方、③のオトイタ～オトオタ「落とした」はサ行五段活用動詞の音便形である。

(4c)は、オヒロイとコオ、ボオヤアのほかはすべて指示詞を含む語である。②にコ系のコオツなどが含まれているが、これは形容詞の場合と同様に長音化のみが方言的特徴を表しているため必然的に②での表記となろう。ソ系は、①にソイカラ、ソイダケ(～ソンダケ～ソンナケ)、ソイデ(～ソンデ)、③にホイツ～ホオツがあるが、筆者の語感ではソとホは入れ替え可能であるのに対し、共通語「それ-」に対応する①のソイカラ、ソイダケ、ソイデを*ソオカラ、*ホオカラ、*ソオダケ、*ホオダケ、*ソオデ、*ホオデと言うことはできず、他のoi連母音とは異質であると考えられる。

3.1.2.2 面接調査における連母音 oi

表3はインフォーマントA～Fの各氏を対象とした調査結果を示したものである。各セルの標示の方針は表2(3.1.1.2)の場合とほぼ同じであるが、筆者が意図した語と異なる語を用いるのが普通だとの回答があったものについては、それを書き添えている。

連母音aiを長音化することのなかったD氏が「青い」でのみ長音でも発音すると回答し、他の各氏は形容詞および動詞の活用形では自発的に長母音で発音することが多かった。

一方、名詞では、2拍語「鯉」「甥」も外来語「トイレ」「トイレットペーパー」「コイン」も形態素境界を含む「羽子板」も長音化は見られなかったが、長めの和語で形態素内部に連母音を持つ「鯉幟」では半数が長音化した発音も行うと回答した。

前節の語彙集の表記では「鯉」がコオとなっていたのに対し、面接調査では全員が連母音で発音したことについては、年代差による標準語化の進展が考えられる(3.2.3節参照)。

表3 面接調査における連母音oiの発音

oi	A	B	C	D	E	F
鯉	oi	oi	oi	oi	oi	oi
鯉幟	oi>oo	oi	oi>oo	oi	oi	oi, 昔 oo
甥	oi	oi	oi (オイッコ)	oi	oi (オイッコ)	oi
トイレ	oi	oi	oi	oi	oi	oi
トイレット ペーパー	oi	oi	oi	oi	oi	oi
コイン	oi	oi	oi	oi	oi	oi
羽子板	oi	oi	oi	oi	oi	oi
重い	oi>oo	oo, オモタア	oo, オモタア	oi, 聞 oo, オモ タイ	oo, オモタア	oo, オモタア
青い	oi>oo	oo	oo	oi>oo	oo	oo
遠い	oi>oo	oo	oo	oi, 聞 oo	oo	oo
多い	oi>oo	oi>oo, ギョオ サン	oo, ヨオサン, ギョオサン	oi, 聞 oo	oo, ギョオサ ン	oo
落とした	oo	oo	oo	osi, 聞 oo	oo	oo

3.1.3 連母音 ui

3.1.3.1 方言語彙集における連母音 ui の表記

語彙集では、多治見方言におけるウ段＋イの表記または対応する共通語等において連母音 ui を含む語は、形容詞で29語、動詞で7語、その他で7語あった。このうち、①ウ段＋イの表記は形容詞7語、動詞0語、その他3語であり、②ウ段＋ウの表記は形容詞13語、動詞6語、その他2語であった。このうち動詞のユルウテ「許して」はサ行五段活用動詞のテ形であり、西濃方言でイ音便化が指摘されているのに対し、多治見では長音化の表記となっている。また、ウ段＋イとウ段＋ウの両方の表記が見られるもの③が形容詞9語、動詞0語、その他2語であった。

(5) 連母音 ui を含む語の方言語彙集における表記

a. 形容詞末尾

①ウ段＋イ

アヤスイ「たやすい」・ウイ「気の毒な」・グズイ「(1) 悪い, (2) 意気地がない (愚図)」・ゲスイ「下品な (下司)」・ヤニグイ「粗末な」・{キヤイ～キア～キヤイクソ～キヤクソ - 「しゃくにさわる」・ヒンタ - 「行儀が悪い」} - ガワルイ (7語)

②ウ段＋ウ

アツウ「厚い」・サブウ「寒い」・シニクウ「やりにくい」・トオクウ「遠い (遠く)」・

ドニスウ「(1) 意気地がない, (2) 鈍い」・…ヌクウ～ノクウ「… (動詞連用形) にくい」・
ヒコツウ「風変わりな」・ヒダルウ「ひもじい」・ヘコニスウ「(1) 気が小さい, (2) 情け
ない」・ミノクウ「見にくい」・ヨダルウ「(1) 張り合いがない, (2) 体がだるい」・{ズク
-「不精な」・ブンリ～ブンタ-「割が悪い」}-ガワルウ (13 語)

③=①・②併記

キサクイ～キサクウ「気のさっぱりした (気さく)」・キツイ～キツウ「強い, 窮屈な」・
ケナルイ～ケナルウ「うらやましい」・コスイ～コスウ「ずるい」・シカクイ～シカクウ
「四角い」・ジョウブイ～ジョウブウ「丈夫な」・タルイ～タルウ「つまらない」・ナルイ
～ナルウ「(1) 弱い, (2) 緩い」・ニスイ～ニスウ「(1) 鈍い, (2) 意気地がない」 (9 語)

b. 動詞

①ウ段+イ

なし

②ウ段+ウ

カツウドル「かついでいる」・クウツク「食いつく」・クウタア「食いたい」・クウナア「食
べなさい」・ツウタルク「ついて歩く」・ツウトル「ついている」・ユルウテ「許して」 (7 語)

③=①・②併記

なし

c. その他

①ウ段+イ

オブイバンテン「ねんねこ半纏」・ツイトウ「とうとう (ついに)」・ユスイ「用水路」 (3 語)

②ウ段+ウ

オツウタチ「朔日」・クウサシ「食いさし」 (2 語)

③=①・②併記

イジャグイ～イジャグウ「無茶食い」・ムイカラ～ムウカラ「麦わら (麦から)」 (2 語)

この分布を見ると、-ガワルイ～ガワルウやニスイ～ニスウ、クイ～クウという共通部分を持つ語 (①キヤイガワルイ類・ヒンタガワルイ, ②ズクガワルウ・ブンリガワルウ類; ヘコニスウ・ドニスウ; クウツク等・クウサシ, ③ニスイ～ニスウ; イジャグイ～イジャグウ) にしても、他の品詞に形容詞の活用語尾を付けたと考えられるグズイ・ゲスイ・トオクウ・キサクイ～キサクウ・シカクイ～シカクウ・ジョウブイ～ジョウブウにしても、ウ段+イの表記とウ段+ウの表記が入り混じっていることがわかる。

一方、アツウ・サブウ・シニクウ・オツウタチ・クウサシのように形態・意味ともに共通語とほとんど変わらない語については、やはりウ段+ウで書かれている。これも、連母音 ai・oi

で見た例と同様に、ウ段長音化するという音声の特徴こそが方言的語彙として採録すべき特徴であるためであろう。逆に言えば、俚言らしい語彙はウ段＋イで書かれていても方言的語彙として採録できるわけであるので、音声的特徴の表し方に注意が向けられていない可能性がある。

なお、連母音 ui に接近音 /j/ が先行し、多治見方言においてそれが脱落する場合には、上記の区分に入らないイ段＋イのイイツケヒボ「結い付け紐」、エ段＋エのカエエ「痒い」・ハジカエエ「むず痒い」、イ段短音のカミイサ「髪結屋（髪結いさん）」、エ段短音のモトエ「元結い」があった。

3.1.3.2 面接調査における連母音 ui

連母音 ui も、インフォーマント D 氏は常に母音連鎖として発音したが、他の各氏は語によって違いがあった。形容詞およびカ行・ガ行五段動詞のタ形は長母音の発音が多くみられ、名詞では外来語「クイズ」および形態素境界を持つ「絹糸」「軽石」は全員が母音連鎖として発音した。他の名詞「西瓜」「六日」「行水」「追突」は、語種に関係なくおよそ半数程度のインフォーマントが長母音としての発音の可能性を示した。

表 4⁷⁾ 面接調査における連母音 ui の発音

	A	B	C	D	E	F
西瓜	ui	ui	uu	ui	ui	ui, 昔 uu
六日	ui>uu	ui	uu	ui	ui	ui, 昔 uu
行水	ui>uu	NO	ui	ui	ui	uu
追突	ui>uu	ui	uu	ui	ui	ui, 昔 uu
クイズ	ui	ui	ui	ui	ui	ui
絹糸	ui	ui	ui	ui	ui	ui
軽石	ui	ui	ui	ui	ui	ui
軽い	ui>uu	uu	uu	ui, 聞 uu	uu	uu
剥いた	ui>uu	uu	uu	ui	uu	uu
脱いだ	ui>uu	uu	uu	ui	uu	uu

3.1.4 連母音 ae

3.1.4.1 方言語彙集における連母音 ae の表記

語彙集では、多治見方言または対応する共通語において連母音 ae を含む単語は形容詞で 0、動詞で 12、その他で 12 あった。このうち、仮名表記がア段＋エを示すもの（①）は他の表記との併記（③'）を含めると 14 語であり、仮名表記がア段長音を示すもの（②）はア段＋イと

の併記 (③”) を含めると7語である。

他に, (6b) の動詞では①’ ウラガヤス・カヤス・ヒックリカヤスや③’ イコカヤのように連母音 ae が /aja/ となる例があるが, これについては3.1.5 節で検討する。

また, (6c) では③” オマイ～オマアのように長母音の他にア段+イのバリエーションを持つものがある。さらに, (6b) ③’ のイコケー～イコッケエ, (6c) ②のテメエの他に, シヨケエ「しようか (シヨカエ)」, トツツカメル「とつつかまえる」のようにエ段長音あるいは短母音のエを持つ音節が表記されている例がある。ア段長音に加えてエ段長音とア段+イも, 連母音 ai の場合にも現れうる発音であり, 連母音 ae の位置にア段+イ, ア段長音, エ段長音が現れているということは, ai と ae が非常に近い存在であることを示していると考えられる。

(6) 連母音 ae を含む語の方言語彙集における表記

b. 動詞活用を呈する語

①ア段+エ

イチマエ「(1) 行っちゃえ, (2) 言っちゃえ」・カエラスト⁸⁾・シガマエル「独占する」・ソバエル「たわむれる」・ハエル「卵から孵る」・ヒイガシマエル「身の縮む思いをする」(6語)

①’ア段+ヤ

ウラガヤス「裏返す」・カヤス「返す」・ヒックリカヤス「ひっくり返す」(3語)

②ア段+ア

コタアラレン「耐えられない (こたえられない)」・ Denguri Kaaeru ~ Denguri Gaaru 「でんぐりかえる」(2語)

③’=①・①’ (～エ段+エ)

イコカエ～イコカヤ～イコケー～イコッケエ「行こうじゃないか」(1語)

c. その他

①ア段+エ

ウテガエシ「口ごたえ」・カエコト「交換」・ソウカエン「そうですか」・トテガエリ「行つてすぐ帰ること, 来てすぐ帰ること」・ババガエロ「土蛙」・ヒマエ⁹⁾・ヒマザエ「手数をかけること」(7語)

②ア段+ア (～エ段+エ)

テマア～テメエ「お前」・ヒキガアロ「墓蛙」(2語)

③”=②・ア段+イ併記

オマイ～オマア「お前」・ガイロ～ガアロ～ギアアロ「蛙」・マイカケ～マアカケ～マアカキ「前掛け」(3語)

(6)に挙げた個々の例から考えられることは、連母音aeが長母音化した表記が見られるのは、形態素「蛙」¹⁰⁾および「前」を含む語が中心で、「返る」「こたえる」もその可能性があるということであろうか。いずれにしても、母音eはiと異なり、動詞活用や形容詞の語尾として現れないことから連母音aeの出現頻度自体が少なく、ここで長母音化の条件を見極めるのは難しい。しかし、少なくとも語彙的には長母音化するものがあると言える。

3.1.4.2 面接調査における連母音ae

次に、インフォーマントの発音および意識調査の結果について述べる。この調査で連母音aeを含む調査語は、「蛙・前掛け・名古屋駅・でんぐり返り・裏返し」の5語である。形態素境界を含む「名古屋駅」で長母音化する人はいなかった。「蛙」はインフォーマントの幼少時代にはガーロ、ギャーロとも言ったとの回答があったが、現在の普段の言い方としては、全員が母音連鎖でカエルと発音した。「前掛け」は前半部分を長母音で言う人と母音連鎖で言う人がいたが、後半部分も「カケ」と「カキ」の二通りがあった。

この調査でも、検査語が少なく長母音化の条件を確定することはできないが、連母音ai, oiの場合と同様に短い和語（蛙、帰る）には長母音化が見られなかった。

表5 面接調査における連母音aeの発音

ae	A	B	C	D	E	F
蛙	ae	ae	ae	ae	ae	ae
帰る	ae	ae	ae	ae	ae	ae
でんぐり返り	ae>aa	NO デングリ	ae	ae	ae	ae, 昔 aa
裏返し	ae>aa	NO ウラ	ae>aa	ae	ae	aa
前掛け	ae>aa**	ae>aa	aa	ae	ae**	aa
名古屋駅	ae	ae	ae	ae	ae	ae

(** 後半部分をカキと発音したことを示す。)

3.1.5 その他の母音の組み合わせ

3.1.1～3.1.4節では、先行研究を参考に長音化の見込みがある母音の組み合わせについて表記と意識の面での長音化について述べたが、本節では、語彙集に見られる表記からこれ以外に長音化する母音の組み合わせがあるかどうか検討する。

(7)では、これまでに検討しなかった母音の組み合わせを語彙集から収集し、3.1.1～3.1.4節と同様に共通語などにおける連母音そのままの表記を①、第一母音の長音化を示す表記を②とし、第2母音のみの音質を示す表記を長短にかかわらず④として示す。

(7) ai・oi・ui・ae以外の組み合わせの連母音の表記

連母音 ao

- ①ア段+オ：ウタオマア（～ウタワマア）「歌おう」
- ②ア段+ア：アアヌキ（～アンヌキ）「仰向け」・アアヌク「仰ぐ（仰向く）」

連母音 au

- ①ア段+ウ：カマウ「(1)面倒を見る，(2)さわる」・コテガウ「転ぶ」・サクマウ「ごまかす，搾取する」・シラ-ウルシ「縞蛇」・タバウ「大事にしまっておく」・ニヤウ「似合う」・バ-ウチ「吾妻下駄」・ムラウ「もらう」

連母音 ea

- ④ア段短音：ツウタルク「付いて歩く」・動詞テ形と補助動詞アゲルの境界に生じる場合（例：ダイタゲル「(1)抱いてあげる，(2)出してあげる」）

連母音 ei

- ①エ段+イ：ヒツケ-イト「躰糸」
- ②エ段+エ：ケ-エト「毛糸」・セエ-ロ「蒸籠」

連母音 eo

- ④オ段短音：動詞テ形と補助動詞オルの境界に生じる場合（例：ドイトレ「どいている（どいておれ）」）

連母音 ia

- ①イ段+ア：ブチ-アミ「投網」
- ④ア段+ア：ラチャ-アカン～ダチャカン「らちが明かない」

連母音 ie

- ①イ段+エ：ミエル「(1)来るの尊敬語，(2)居るの尊敬語」
- ④エ段+エ：オセエル「教える」

連母音 io

- ④オ段+オ：カショオケ「米を研ぐ桶（カシ+桶）」

連母音 oa (+i)

- ④コナアダ「この間」

連母音 oe

- ①オ段+エ：コエル「太る」・ホエル「騒々しくまくしたてる」

連母音 ou

- ①オ段+ウ：ホロウ¹¹⁾「拾う」

連母音 ue

- ①ウ段+エ：カツエル「飢える」

①～④：コキスエル～コキセエル「何度も叩く」

連母音uo

④オ段短音：チコンキ「蓄音機」

ここまでの観察から、前節までに見た4種の連母音ai・oi・ui・ae以外の連母音では、①のようなそのままの母音の表記が多くみられるのに加えて、第一母音の音質が消えて第二母音のみとなる④のタイプの表記も見られることがわかる。一方、②の第一母音のみが長音化するタイプは、共通語でも長音化する連母音eiのほかは連母音aoにしか見つからない。④の第二母音のみになるタイプもまた、どの母音の組み合わせも数が少なく、連母音ai・oi・uiの長音化のようにこの地方特有の規則的な現象とまでは言えず、他に規則的に長音化する母音の組み合わせはなさそうであると言える。

さらに、母音の連続に近い音質を持つ接近音と母音との連鎖に関して、接近音の脱落と添加・挿入を示す次のような表記が語彙集に見られる。

(8) 接近音の脱落と添加・挿入

a) ヤ行子音の脱落

語頭：イイツケヒボ「結いつけ紐」・イガム～エガム「歪む」・イゲ「湯気」・イズ「柚子」・イスグ「ゆずぐ」・イズル「譲る」・イビ「指」・イビハメ～イビワ「指輪」・イルス「許す」；ウエン「油煙」・ウデル「茹でる」；エエ「良い」

語中：アア「鮎」・アイマチ～アアマチ「あやまち」・オツウ～オツイ「汁（おつゆ）」・カエエ「痒い」・カミイサ「髪結屋（髪結いさん）」・ハアイケ～ハイケ（～ハヨイケ）「早く行け」・ハジカエエ「むず痒い」・サアナラ～サイナラ「さようなら」・ブッタレ「ぶってやれ」・マア「繭」・マアハイ～マアハア～モオハイ～モオハア「もう既に（もはや）」¹²⁾・マアゲ「眉毛」・モトエ「元結い」；他、動詞テ形と補助動詞ヤルの接続において（例：ダイタル「(1) 抱いてやる、(2) 出してやる」）

b) ワ行子音の脱落

語中：アライマシ～アライマアシ～アラアマシ～アラアマアシ（～アライマワシ）「食器洗い（洗い回し）」・タアケ「馬鹿（たわけ）」・マアタ「真綿」；コンダ「今度は」・チッタア「少しは（ちっとは）」

c) ヤ行子音の添加・挿入

語頭：ヨモオ～ヨモタア「重い」

語中：イイヤア「言い合い」・クミヤア「組合」・シヤア「試合」・ツカメヤア「つかみ合い」・ノリヤア「乗合」・ヘシヤア「押し合い（へし合い）」・ポオヤア「鬼ごっこ（追

い合い)・ミヤア「見合い」・ヨリヤア「寄り合い」・イイヤウ「言い合う」・ニヤウ「似合う」・ハヨ「(魚の名) はえ」・マニヤワセ「間に合わせ」；カヤス「返す」・ウラガヤス「裏返す」・ヒックリカヤス「ひっくり返す」

d) ワ行子音の挿入

語中：グワイ〜グワア「具合」

e) ワ行子音からヤ行子音への交替

語中：ニギヤウ「賑わう」

以上のような接近音の添加・挿入や脱落は岐阜県の他地域を含む方言語彙を集めた奥村(1976)や平山他編著(1997)にも数多く見られ、また岐阜県以外の諸方言でも観察されるが、多治見方言の場合には接近音の脱落に伴って生じる連母音が長音化する現象象((8a) アア, マア等)が見られる点が、これまでの観察と関連する。上のa), b)の接近音の脱落は、ほとんどの場合、母音が長音化するか、または音質が変化するなどして、少なくとも語形のゆれのうちの一つは母音連鎖を持たない表記となっている。また、c), d)の接近音の挿入は母音連鎖を回避する方向に作用し、全体として、長母音は好むが母音連鎖は避けるという方向に向かっているように見える。

3.1.6 各調査結果の検討

3.1節では母音の組み合わせによる長音化の有無を整理してきたが、従来から指摘されているai・oi・uiの3種の連母音は、語彙集の表記においてやはり長音化の傾向が強いのにに対し、連母音aeは長音化が見られたものが少なかった。また、以上の4種以外の連母音では、第一母音を延長したタイプの長母音は、表記上は連母音eiおよびaoを持つ各2語にしか現れなかった。

面接調査では連母音aeが長音化しているものがあり、長音化する場合があることは確実になったが、それがai・oi・uiと同程度の頻度で長音化するのか、それとも西濃方言の融合の場合(奥村 1976: 179)のようにaeは長音化しないものがより多くあるのかは、まだ明らかにはできていない。

また、ai・oi・uiの3種は、語彙集の表記では独特な俚言は連母音表記、共通語にある語の訛りは長母音表記という具合に表記が偏っている感がある。実際の発音において俚言で長音化せず、共通語にもある語でのみアカア「赤い」のように母音連鎖で発音するということは考えにくいことから、各語について実際に長音化するかどうかは、やはり面接等の調査によって個々に明らかにしていかなければならない部分が大きいことがわかった。

3.2 長母音化が生じる形態論的条件

これまでの語彙集における表記および面接調査の結果から、形態素のタイプや境界によって長母音化が生じる頻度に違いがあることを母音の組み合わせごとに指摘してきた。本節では、こうした形態論的観点から長母音化の生起について分析する。

3.2.1 方言語彙集に見られる特徴

語彙集に見られる語をこれまでと同様の品詞の順序で見えていく。

まず、形容詞の語幹末母音＋活用語尾の部分に生じる連母音を見ると、これは上で検討した3種の組み合わせ (ai, oi, ui) のいずれにおいても連母音表記と長母音表記が共に見られた。特に形容詞については共通語と形態上も意味上もほとんど変わらない語彙が活用語尾の部分の発音の違いのみによって多治見方言の特徴を示している場合が多数掲載されており、このような語は長母音表記が多く見られた。

次に、連母音を持つ動詞の見出し語のほとんどは、助動詞マイ～マア「～しよう (勧誘)」、ナイ～ナア「～なさる、なさい」を持つ語形、テ形およびタ形、終止形に分けられる。助動詞のうち、マイ～マアとナイ～ナアは②長母音表記および③＝①・②併記であった。一方、語幹末がイとなるテ形およびタ形は、共通語でも連母音を持つカ行・ガ行五段活用動詞と共通語では音便を起こさないサ行五段活用動詞があるが、ともに①連母音表記と②長母音表記が見られ、特に③＝①・②併記が多くあった。終止形では、連母音aeを持つ俚言的な①シガマエル・ソバエル・ハエルに①の連母音表記が見られ、連母音aeが [aja] と発音される①'ウラガヤス・カヤス・ヒックリカヤスの表記も見られたが、長母音化を示しうる②ハアル・チョオダアス (<ai)；クウツク・ツウタルク (<ui)；デングリカアル～デングリガアル (<ae) および③ボイダス～ボオダス・ボイツク～ボオツク (<oi) 等は4種の連母音にわたりながらも数が少なく、俚言と言うより訛に近いものが多く、発音の特異性に気づかれた語が挙げられているといったところであるように見える。

その他の語に見られた連母音は、形態素内部にある場合がほとんどであり、それは①連母音表記と②長母音表記および③＝①・②併記が見られたが、連母音aiを形態素境界に持つカマイタチ・タダイモ・チャイロオおよび連母音aeを形態素境界に持つソウカエンでは①の連母音表記のみであり、シバイ～シバアのみが③＝①・②併記であった。

3.2.2 面接調査

ここでは、表2～5で既に母音の組み合わせごとに見てきた面接調査の結果を、形態論的特徴により分けて整理する。語幹内部 (表6・7) は結果にばらつきがあったが、短い語、外来語、連母音が形態素境界をまたぐ語では長音化が少ないと言える。一方、どの組み合わせの連母音

においても、形容詞の語幹末母音＋活用語尾の部分（表8）および動詞のタ形（表9・10）に現れる連母音は長音化が高頻度に観察された。その中でもサ行五段活用動詞タ形（表10）の音便化した形は、長音化の自発性が最も高かった。

表 6-1 形態素内の連母音 ai

ai	A	B	C	D	E	F
鯛	ai	ai	ai	ai	ai	ai
入る	ai>aa	aa	aa	ai	ai	ai>aa
お参り	ai>aa	ai>aa	aa	ai	ai>aa	aa
大根	ai>aa	ai>aa	ai>aa	ai	ai	ai, 昔 aa
階段	ai	ai	ai, 昔 aa	ai	ai	ai, 昔 aa
タイル	ai	ai	ai, 昔 aa	ai	ai	ai
タイヤ	ai	ai	ai	ai	ai	ai
ネクタイ	ai, 老 aa	ai>aa	aa	ai	ai	a
ワイン	ai	ai	ai	ai	ai	ai

表 6-2 形態素内の連母音 oi

oi	A	B	C	D	E	F
鯉	oi	oi	oi	oi	oi	oi
鯉幟	oi>oo	oi	oi>oo	oi	oi	oi, 昔 oo
甥	oi	oi	oi	oi	oi	oi
トイレ	oi	oi	oi	oi	oi	oi
トイレットペーパー	oi	oi	oi	oi	oi	oi
コイン	oi	oi	oi	oi	oi	oi

表 6-3 形態素内の連母音 ui

ui	A	B	C	D	E	F
西瓜	ui	ui	uu	ui	ui	ui, 昔 uu
六日	ui>uu	ui	uu	ui	ui	ui, 昔 uu
行水	ui>uu	NO	ui	ui	ui	uu
追突	ui>uu	ui	uu	ui	ui	ui, 昔 uu
クイズ	ui	ui	ui	ui	ui	ui

表 6-4 形態素内の連母音 ae

ae	A	B	C	D	E	F
蛙	ae	ae	ae	ae	ae	ae
帰る	ae	ae	ae	ae	ae	ae
でんぐり返る	ae>aa	NO	ae	ae	ae	ae, 昔 aa
裏返し	ae>aa	NO	ae>aa	ae	ae	aa
前掛け	ae>aa	ae>aa	aa	ae	ae	aa

表 7 形態素境界をまたぐ連母音

	A	B	C	D	E	F
薩摩 - 芋	ai>aa	ai>aa	aa	ai	ai	ai, 昔 aa
羽子 - 板	oi	oi	oi	oi	oi	oi
絹 - 糸	ui	ui	ui	ui	ui	ui
軽 - 石	ui	ui	ui	ui	ui	ui
名古屋 - 駅	ae	ae	ae	ae	ae	ae

表 8 形容詞終止形語尾

	A	B	C	D	E	F
甘い	ai>aa	aa	aa	ai, 聞 aa	aa	aa
重い	oi>oo	oo	oo	oi, 聞 oo	oo	oo
青い	oi>oo	oo	oo	oi>oo	oo	oo
遠い	oi>oo	oo	oo	oi, 聞 oo	oo	oo
多い	oi>oo	oi>oo	oo	oi, 聞 oo	oo	oo
軽い	ui>uu	uu	uu	ui, 聞 uu	uu	uu

表 9 カ行・ガ行五段活用動詞のタ形

	A	B	C	D	E	F
書いた	ai>aa	aa	aa	ai	ai	aa
泣いた	ai>aa	aa	aa	ai, 聞 aa	aa	aa
剥いた	ui>uu	uu	uu	ui	uu	uu
脱いだ	ui>uu	uu	uu	ui	uu	uu

表 10 サ行五段活用動詞のタ形

	A	B	C	D	E	F
出した	aa	aa	aa	asi, 聞 aa	aa	aa
落とした	oo	oo	oo	osi, 聞 oo	oo	oo
治した	oo	oo	oo	osi, 聞 oo	oo	oo

3.2.3 各調査結果の検討

面接調査の結果を語彙集の調査結果および芥子川 (1957) 等の先行研究と比較する。

まず、動詞のうち、サ行五段活用動詞タ形の音便化した形について、D氏以外のインフォーマントに対し、例えばインフォーマントが「治した」をナオオタと発音した後で調査者が「ナオイタのように言うことがありますか」と尋ねると、「そうは言わない。ナオオタと言う。」と答えた。母音連鎖としての発音が否定されるということは、前節で見た語彙集の調査結果とは食い違う点である。このことは、語彙集の編纂時にイ音便化していた連母音発音が現在の60

歳代までに長母音発音に変化したと見るべきか、あるいは語彙集における連母音の表記に一貫性がないための食い違いと見るべきかのどちらかであろう。使用した語彙集は様々な点で一貫性に欠けることから、ここでは後者と捉えておく。

逆に、名詞のうち「鯛」「甥」「鯉」といった2モーラの和語は、面接調査では長音化がなかったのに対し、語彙集ではハア、コオ、ザイ～ザアと長音表記が見られた。芥子川(1957)では「甥」「鯉」が調査されており、動詞テ形・タ形や形容詞終止形の連母音oiの長音化が盛んな4つの調査地点のうち、「甥」は市外2地点、「鯉」は市外1地点で母音連鎖となるが、多治見市滝呂では共に長音化している。このことから、少なくとも過去には2モーラ語でも長音化があったと考えられ、それが衰退しつつある可能性があると言える。

一方、語幹内の形態素境界に連母音を含む語は、面接調査では全体に母音連鎖となる中で連母音aiを含む「薩摩芋」にのみ長母音発音が見られたが、語彙集ではタダイモ「里芋」などに全く長母音表記が見られなかった。相山女学園大学方言研究グループ(1979)および太田(1979)では「薩摩芋」の形態素境界における長音化が見られることからすると、これは語彙集の記述方針の問題か、あるいはサツマアモ「薩摩芋」とタダイモ「里芋」との間に何か異なる要因があるか、ということになるだろう。

形態素境界を含む語に関して、芥子川(1957)によると、連母音oiを含むトイシ(「砥石」か?)とゴイサギ(「五位鷺」か?)は連母音oiの長音化が盛んな4つの調査地点のうち、瑞浪市日吉と土岐市曾木では長母音となるが、多治見市滝呂と土岐市駄知では母音連鎖発音となっており、この2語が推定どおりの意味を持つとすると、形態素境界ではoiが多治見において長音化しない例が挙げられていることになる。芥子川(1957)は他の母音の組み合わせでは形態素境界を含む例を挙げていないため、これが母音の違いによるものなのかどうかかわからないが、面接調査の結果も合わせると、形態素境界を含む場合にはaiとoiで長音化のしやすさに違いがあるということも可能性としては残されている。

3.3 長母音化の音韻論的条件

前節では、形態論的な条件からどのような場合に連母音が長音化するかを整理したが、本節では音韻論的観点から検討する。音韻論的に見れば、連母音 V_1V_2 が長音化するか否かは、二つの母音の一体性が増して1音節に収まる二重母音的な扱いになるかどうかと関わっていると考えられる¹³⁾。一体性が強いが否かは、一つには形態素境界が V_1 と V_2 の間にあるかないかが大きく関わるが、さらに、連母音 V_1V_2 の前後にある音韻が音節構造の点で関わってくる可能性がある。共通語等で1音節に3モーラ以上が含まれるような重すぎる音節(超重音節)が避けられる傾向があることは指摘されているが、この傾向がもし多治見方言にもあるとすると、前後の音韻によって V_1 と V_2 の間に音節境界が置かれることになりうるためである。連母

音 V_1V_2 の直前の音素を P_1 、直後の音素を P_2 とする（すなわち $P_1 V_1V_2 P_2$ ），と、 V_1 と V_2 の結びつきと P_1 と V_1 あるいは V_2 と P_2 の結びつきのどちらが優先的に音節化されるかという問題である。 P_1 が他の母音であったり、 P_2 が特殊拍になりうる音である場合には、 $P_1 V_1$ で二重母音を持つ重音節を成したり、 V_2P_2 で特殊拍を持つ重音節を成したりすることになるため、超重音節を避けるとうると V_1V_2 が一体化しにくいことが予想される。

また、音節構造の問題として、 V_1V_2 がまとめられると1音節語となるような2モーラ語では、語の最小性制約により1音節化が阻止されるという可能性もある。

本節では、以上のような条件にある連母音がそうでない場合と比較して長母音化しにくいかどうかを検討する。

3.3.1 方言語彙集に見られる特徴

語彙集の表記においては、3.1.5 で見たように、シヤア「試合」など連母音 ai 等の前に接近音(= P_1) が挿入されて、超重音節になる可能性が消えているものが少なからずあり、 P_1 が母音である例が非常に少ない。

一方、接近音が脱落して P_1 が母音となる数少ない例であるカエエ「痒い」・ハジカエエ「むず痒い」は、仮に $/j/$ が先に脱落して $/-au.i/$ と音節化されたとすれば長音化は起きなかったであろうが、実際には、連母音 ui = V_1V_2 がエエとなることにより $V_2 = R/$ の特殊拍と捉えられ、 V_1V_2 で2モーラの1音節を構成することが優先され $/-a.jui/ > /-a.jeR/ > /-a.eR/$ となっていると考えられる。

このように表記を見る限り、接近音の存在と長母音化によって超重音節化が回避されていると見られ、 P_1 が母音であることや P_2 が特殊拍であることによって長音化が阻止されている例は見当たらない。

また、語の最小性制約について言えば、語彙集の表記ではコオ「鯉」などが見られ、長音化は阻止されていないようである。

3.3.2 面接調査

面接調査では、 P_1 が他の母音である語句と P_2 が特殊拍になりうる音であるような語句を調査語に含めた。

まず、 P_1 が母音であるのは、形容詞「青い」「多い」「遠い」とサ行五段活用動詞「治した > ナオオタ」である。これらを同じ品詞で P_1 が子音であるものと比較してみると（表11）、長音化の傾向に何ら違いがないことがわかる。

表 11 P₁ が子音である場合と母音である場合との比較

P ₁		A	B	C	D	E	F
子音	甘い	ai>aa	aa	aa	ai, 聞 aa	aa	aa
	重い	oi>oo	oo	oo	oi, 聞 oo	oo	oo
	軽い	ui>uu	uu	uu	ui, 聞 uu	uu	uu
母音	青い	oi>oo	oo	oo	oi>oo	oo	oo
	遠い	oi>oo	oo	oo	oi, 聞 oo	oo	oo
	多い	oi>oo	oi>oo	oo	oi, 聞 oo	oo	oo
子音	出した	aa	aa	aa	asi, 聞 aa	aa	aa
	落とした	oo	oo	oo	osi, 聞 oo	oo	oo
母音	治した	oo	oo	oo	osi, 聞 oo	oo	oo

次に、P₂が特殊拍になる場合を見る。この条件に適合するのは外来語や形態素境界を含む場合に限られる。外来語「ワイン」「コイン」はこれに当たり、インフォーマントの全員が母音連鎖で発音したが、そもそも外来語は「ネクタイ」を除き、ほとんどが母音連鎖であったことから、語種の影響も考える必要があり、特殊拍の影響と断じることはできない。

また、形容詞に-ッチャ「～と言えば」を付けた形は、促音を付けない場合（表8参照）と比較すると、インフォーマントE氏には顕著に長音化が抑制される傾向が見られ、B氏は特にP₁が母音である語については長音化しつつも促音を入れない発音をした。その一方でC氏は促音がない場合と変わらず長音化し、A氏は、方言的な語尾-ッチャの影響か、促音がない場合よりむしろ自発的な長音化を呈した。個人によりこのように異なる結果が出たことから、この面接調査の範囲では音節構造上の制約の影響は不明である。

表 12 P₂=/Q/ の場合の連母音の発音

P ₂ =/Q/	A	B	C	D	E	F
弱い Q	aa	ai	aa	ai	ai	ai>aa
強い Q	oo	oi>oo	oo	oi	oi	oo
青い Q	oo	oo(Q なし)	oo	oi	oi	oi>oo
多い Q	oo	oo(Q なし)	NO	oi	oi	oi
軽い Q	uu	uu	uu	ui	ui	ui>uu

なお、形容詞に-ンヤ「～のだ」を付けた形の発音も求めたが、意味の異なる-ヤン「～じゃないか」に言い換えてしまう例が多発し、連母音をどう発音するかにかかわらず言いにくいようであったため、この形での考察は断念した。

また、語の最小性制約について見ると、面接調査では「鯛」「鯉」「甥」の2モーラ語がまったく長母音化を見せておらず、制約が有効になっている可能性を示す。

3.3.3 各調査結果の検討

まず、 P_1 が母音である場合の影響は、語彙集の表記からは接近音の挿入が3連母音を阻害する例があることがわかったが、面接調査の結果からは窺えず、 V_1V_2 の長母音化を妨げることはないと考えられる。面接調査で検討した表11の P_1 =母音となる各語の場合、 V_1 にアクセント核があることも、 P_1 を核としない音節化に関与している可能性がある。

一方、 P_2 が特殊拍になる場合は、面接調査では、個人によっても特殊拍の性質によっても長母音化を阻害することがあった。しかし、どのような形態素の連母音にどのような特殊拍が後続した場合にどの程度阻害されるかといった詳細な分析は今後の研究にまたなければならない。

また、最小性制約については、語彙集の表記では影響が見られなかったのに対し、面接調査では全ての2モーラ語が長音化しないという結果であった。これを通時的変化と見るかどうかを判断するには、世代差のある音声データの収集が必要であろう。

4. 長母音化の音声的実態

連母音の音声的実態に関して、尾張地方や西濃地方の融合母音になることについては、例えば /ai/ では金田一(1953)の [æ:] と並んで柴田(1950)の [æə] などのIPA表記が行われているように、途中で音色が変わる二重母音的なものとの見方もある。これに対して、多治見等の長母音化した発音については、金田一(1953)のように [ɑ:] とするか、奥村(1976)のように [a:] とするかの違いはあっても、途中で音色が変わるという見解はないようである。

ここでは、「お婆ちゃん」「コート」「スーツ」にあるような本来的な長母音の発音と、連母音が長音化した場合および長音化しなかった場合とを比較し、連母音の長音化したものが本来的な長母音と音声的に違いがなく、長音化しない連母音のみが異なる発音となることを、もっとも明瞭な録音が得られたインフォーマントB氏の例で確認する。本来は、すべての例についてフォルマントの変動を計測したうえで各検査語の長音化の有無を確定すべきであるが、面接調査の中でインフォーマント各氏がそれぞれの発音が連母音であるか長母音であるかについて明確に区別する意識を持っていたため、その作業を省略した。

図1～11では、300Hz広帯域スペクトログラムにおいて、横軸の目盛りが0.050ミリ秒ごとに付されており、問題とする連母音あるいは長母音の前後にカーソルを合わせている。表示されている周波数域(縦軸)は0～4050Hzである。多数の例のうち、なるべく前後の子音環境の近いものを提示する。

図1のオバアチャン「お婆ちゃん」の長母音 [a:] の部分のフォルマントは、前後の子音部分とのわりに大きなフォルマント遷移があるため比較しにくい。これと同様に長母音で発音された図2や図4ではフォルマント遷移が大きくなり、母音の初めから終わりまで第1・第2フォルマントがほとんど変動しない [a:] であることがわかる。一方、図3と図5では母音の途

中で第1・第2フォルマントの間隔が開き、前舌母音[i]または[e]に移行したことがわかる。

図1 「お婆ちゃん」

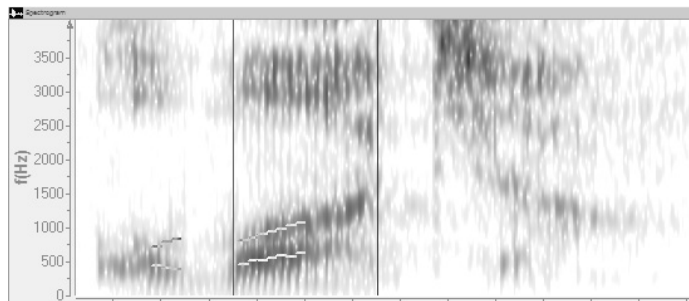


図2 サツマアモ「薩摩芋」

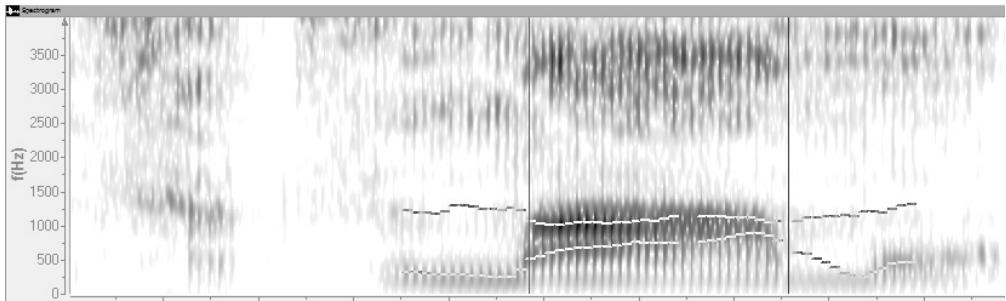


図3 ダイコ「大根」

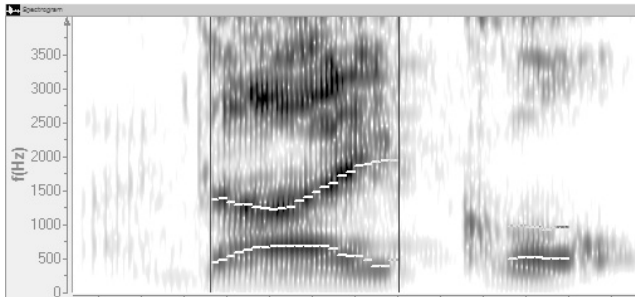


図4 マアカケ「前掛け」

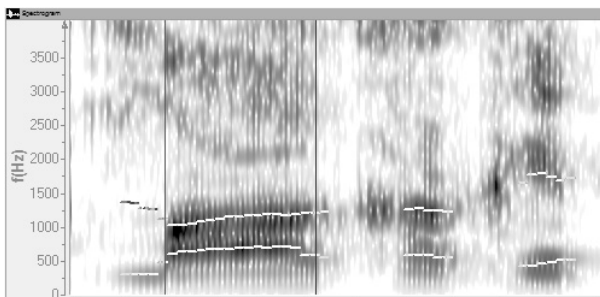


図5 カエル「帰る」

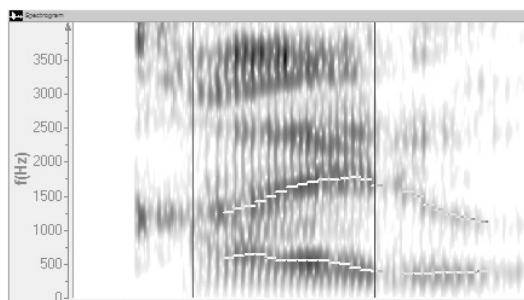


図6は本来的な長母音 [o:] を持つ「コート」の発音を示す。図7の「鯉幟」の連母音部分は図6の長母音に近いフォルマントを示すのに対して、図8「鯉」では途中からフォルマントの間隔が広がっている。

図6 「コート」

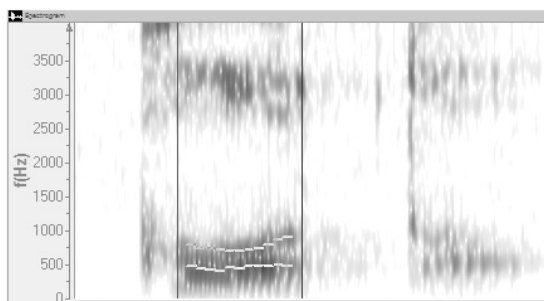


図8 コイ「鯉」

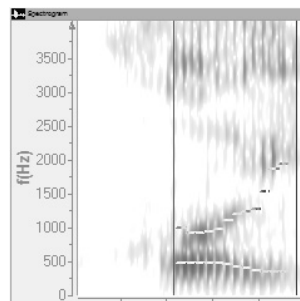


図7 コオノボリ「鯉幟」

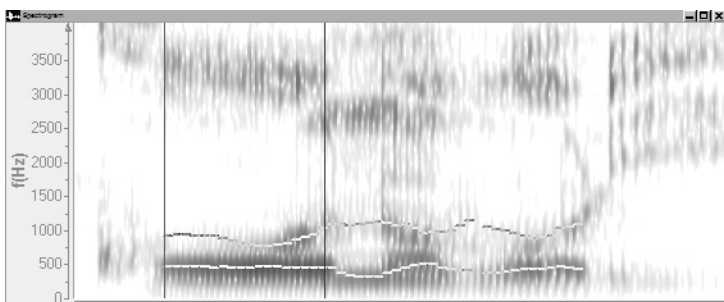


図9は本来的な長母音 [u:] を持つ「スーツ」の発音である。この母音と図10「追突」の連母音 ui の部分のフォルマントは近似しているのに対し、図11「軽石」の連母音の部分のフォルマントは途中で変化していることがわかる。

図9 「スーツ」

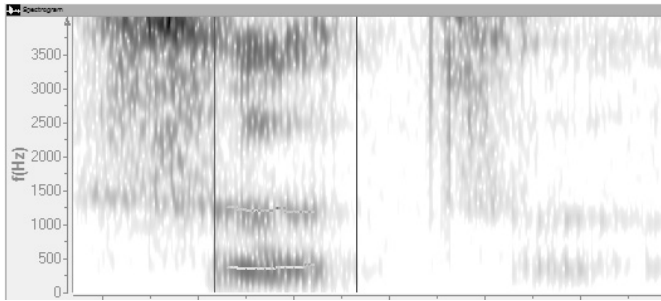


図10 ツウトツ「追突」

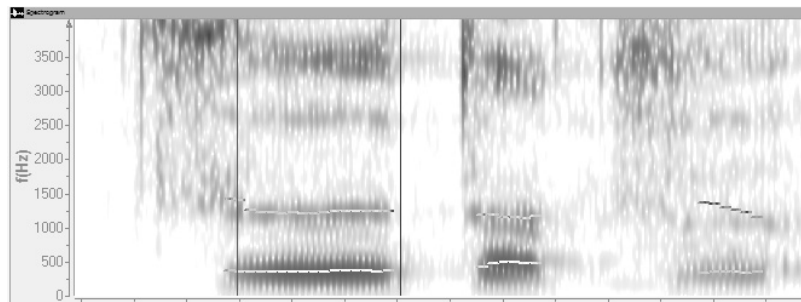
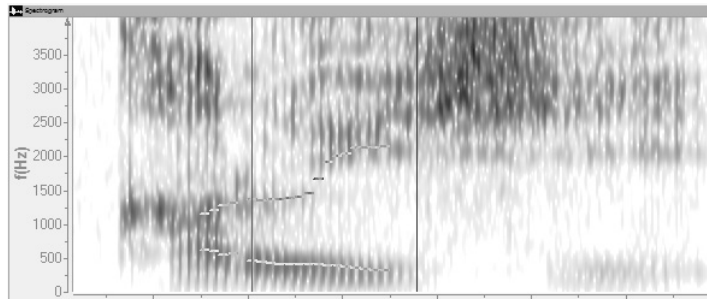


図11 カルイシ「軽石」



5. 長母音化の音韻論的扱い

前節までの観察をもとに、ここでは長母音化の音韻論的扱いについて検討する。

多治見方言において連母音が長母音化する現象を音韻論的に記述しようとするとき、次のような考え方の候補A～Cが挙げられる（「⇒」は規則による変換があることを、「→」は変換がないことを示すものとする）。

- A: 共通語と同じ母音体系を持ち、特定の母音音素が隣接した場合に、引き音に変換する規則を持っている。例えば「赤い」{akai} ⇒ /akaR/, 「それから」{soikara} → /soikara/。

B: 共通語と同じ母音に加えて、わたり音的な音素 /J/ 等を持ち、これが母音に後続した場合に引き音に変換される。例えば「赤い」{akaJ} ⇒ /akaR/ , 「それから」{soikara} → /soikara/。

C: 長母音は引き音を伴う母音として連母音とは別に存在し、変換の過程を必要としない。例えば「赤い」{akaR} → /akaR/ , 「それから」{soikara} → /soikara/。

実際には、話者は、4種の連母音 ai・oi・ui・ae に関して、仮名表記どおりの発音が共通語の発音（もしくは「正しい発音」）との認識があり、母音連鎖としての発音も容易に行うことができる。また、特に連母音 ai・oi・ui の3種の長音化はこの地方の方言の特徴であることも広く知られており、インフォーマントの中には長音化の現象を「イ抜き」と概念化して呼ぶ人もいた。このような言語意識があるため、共通語を話そうとして方言的語彙をそれと気づかずに使う場合でも母音の発音は共通語と同様にすることがある。例えば、体が辛くないかと尋ねるときに、方言話者同士であればエラナーカと言うところ、他所から来た人にはエラ（ク）ナイカと言うとか、ヤグウ¹⁴⁾ という俚言形容詞の意味を来訪者から問われて「ヤグイということですよ。」と説明したりするといった具合である。このことから、共通語の母音連続に対して方言コードでは母音 + /R/ というようにスイッチングしていると言える。特に、形容詞の活用語尾イと五段活用動詞のイ音便に関しては、規則的にイと /R/ を交替させていると思われる。

ただし、西濃方言においてサ行五段活用動詞タ形およびテ形のイ音便化が生じ、サイタ（差した）・ダイタ（出した）と連母音を用いることがある（奥村 1976: 200f）のに対し、面接調査の結果によれば多治見ではオトオタ、オトシタとは言ってもオトイタとは言わない。他にも、「頂戴」とに音韻的に対応する¹⁵⁾ チョオダアスは、*チョオダイスと言うことはないし、共通語で使用頻度が低いと思われる「体もない」に音韻的に対応する語はタアモナアという形でのみよく使われる等、イと交替しない長母音も存在している。また逆に、3.1.2.1 で見たように、指示詞「それ」を含むソイカラ、ソイデ、ソイダケを*ソオカラ、*ホオカラ、*ソオデ、*ホオデ、*ソオダケ、*ホオダケと言うことはできず、長母音と交替しないイも存在する。

つまり、単純に長音と連母音を置き替えているのではなく、語彙項目の中で別物として扱っているわけであり、多治見方言話者が持つ多治見方言の語彙目録の中には、連母音を持つ語と長母音を持つ語が区別されており、共通語の語彙目録より長母音を持つ語が多く登録されているということになる。上記のAの仮説ではどのような場合に長母音化するか予測できないことから、不都合である。では、仮説Bか、Cかということになるが、多治見方言で長音化する発音を日常的に使っている人にとって、仮説Bは余分なプロセスを含むことから、Cのほうが妥当であると考えられる。その場合、共通語とのコードスイッチングを行うことによって、場合によって「赤い」に /akai/ が用いられることになる。しかし、例えばインフォーマントD氏のように、ほとんど連母音の長音化を行うことのない人にとっては、日常的な音韻体系が共通

語のそれになっていると考えられ、世代によってはその構成員の多くが共通語の音韻体系のみを持つようになっていいる可能性もある。

6. まとめ

本稿では、多治見方言の記述の基盤となる音韻体系の解明を目指して、連母音 ai・oi・ui・ae の長母音化の実態について調査を行った。その結果、次のことが明らかになった。

- a. 複数の形態素にわたって、連母音が第一母音の音色を持つ長母音として発音される母音の組み合わせは、ai・oi・ui・ae の4つである。
- b. 現在60歳代の多治見方言話者において、個人差は認められるが、連母音の長音化の現象は存続している。
- c. 形容詞の終止形およびカ行・ガ行五段活用動詞のタ形・テ形における連母音は、ほぼ規則的に長母音化する。
- d. サ行五段活用動詞のタ形・テ形は、西濃方言などでイ音便を起こすのに対し、多治見方言では長母音を生じる。
- e. 形態素内部の連母音は、面接調査の範囲では2モーラ語には長音化が見られなかった。
- f. 形態素内部の連母音は、外来語においては長音化しない傾向が強く、長音化する語は限定的であった。
- g. 3モーラ以上の語の形態素内部の連母音長音化について、調査語とした和語と漢語の間には大きな相違はなく、語や個人による違いが大きかった。
- h. 形態素境界の連母音は、長音化しない傾向が強く、長音化する語は限定的であった。
- i. 長音化した連母音の音声の実態は、本来の長母音と特に異なる点は見当たらない。
- j. 連母音は一定の母音音素の組合せであれば規則的に長音化するわけではないことから、音素レベルで単なる母音の連鎖と長音化する母音は区別されなければならない。

なお、今回の面接調査では敢えて俚言を参照せずに連母音の発音に注目して調査を行ったが、俚言の場合の連母音の長音化の実態についても調査する必要がある。今回参考とした方言語彙集の表記については、その方針に不明な点があることから、今後の語彙調査の中で連母音の発音についても明らかにし、各語の音韻表記を定めて行かなくてはならない。

ところで、多治見を中心とする地域と愛知県瀬戸市にかけて広がるこの地域で、連母音の長音化が生じた経緯はどのようなものであろうか。この地域は日本有数の陶磁器生産地と重なることから、芥子川 (1957: 29f) は山・小屋・窯の中という陶工が生活する環境において「発音運動と聞き取りの上に一般と異なったものが行われるに違いない」と考え、[ai] については二つ

の音の間に「調音上すでに張りときこえにおいて差があり（中略）[i]はほとんど聞きとれない状態におかれるであろう」との理由から瀬戸に長音化が生じ、江戸初期に「陶工とともに多治見へもたらされた」と見ている。しかし、日本各地の他の陶磁器生産地でこのような発音の変化が生じているわけではないことから、陶工の生活環境に結びつける仮説は立証が難しい。また、この地域では連母音/ai/だけでなく狭母音同士の/ui/も長音化することから、「張りときこえの差」というのも合点が行かない¹⁶⁾。また、芥子川(1957: 29)はこの地域における長音化は周囲の尾張地方に見られるような融合母音 [æ:] を経由しないで直接長音化していると考えているが、その根拠は、この地域が共通した陶磁器生産地という特殊な事情を抱えているという上記の仮説に結び付けるのみである。

結局、長音化がどのような契機によってどこに始まり、どのように広がったのかについては今のところ解明できていないが、今回の面接調査における意識調査で「昔はダアコン（大根）と言ったが、今はダイコンと言う」「自分の親の世代の人はネクタア（ネクタイ）と言うが自分は言わない」といった回答が複数あったことから、現在失われつつあることは窺える。今回の調査対象であった60歳代では、方言と共通語のスイッチングによって長音化を生じる場合が見られたが、より若い世代では方言コードをほとんど持ち合わせず、スイッチングを行うことがないケースも予測される。意識調査におけるコードの現れ方を計算したうえで、現段階において、各年代にどれだけの長音化が行われているかの調査も行う必要がある。

注

- 1) 奥村(1976: 259)は、この3種の連母音が長音化する岐阜県内の地域として、地図を示し、多治見市・土岐郡（現、多治見市）笠原町・土岐市・瑞浪市のいわゆる旧「東濃三市一町」全域とそれに隣接する恵那郡（現、恵那市）山岡町西部・可児郡御嵩町・可児郡可児町東部・可児郡八百津町南部辺りを示している。また、愛知県から岐阜県南部にかけてのこの3種の連母音の発音を調査した芥子川(1957: 16)は、連母音 ai が長音化する地域として岐阜県側では上述の奥村(1976: 259)と似た分布図（ただし瑞浪市東部や山岡町辺りが含まれていない点が異なる）を示し、愛知県側ではほぼ現在の瀬戸市に当たる地域を中心として示している。
- 2) ただし、外住歴は多治見市に住んでもおらず多治見市へ通勤などもしていない時期のみを掲載した（F氏は40～57歳の間、多治見同様に連母音の長音化が見られる土岐市に居住し、多治見市内へ通勤していたが、これはこの地域での方言使用期間に当たると判断し、外住歴に含めていない）。職業欄は、この地域の主産業である陶磁器産業に就いている人については、自営か会社員かに関わらず「陶磁器産業」と記した。
- 3) ただし、同報告書の序文において真田信治氏は「ただ、私としては、音声の聴取やその表記についてまだ不満な点も多く、この結果を完全なものとは認めていない。」と述べている。
- 4) 三の倉町は愛知県春日井市と隣接する旧可児郡の山間に位置し、1944年に多治見市に合併された地域であり、融合母音 [æ:] を用いる尾張地方との境界にある。
- 5) カイヨウビ「火曜日」は、本来1モーラの力「火」がカイとなっている点で珍しい例である。経緯は不明であるが、「ゲツ、カー、スイ…」という読み方から共通語では「ゲツ・カイ・スイ…」と言うのかと過剰矯正したものかもしれないと推測する。

- 6) 奥村 (1976: 359) では「(仲間に) 入れて」の意でマゼテが調査地点「多治見・笠原」として挙げられている。なお、他の例からここでの「多治見・笠原」は「多治見市笠原町」の意と読めるが、出版当時、笠原町は土岐郡であったので、どこを指すのかが判然としない。
- 7) 表中、NO は当該の検査語を用いないなどの理由で回答が得られなかった個所を示す。
- 8) カエラストについて、『多治見方言』では「帰らないと」、『土岐方言』では「かえろうと」という語釈を付けている。『多治見方言』では「今かえらすと、まっと遊んでけ。」(筆者訳: 今は帰らずに、もっと遊んでいけ) という例文がついていることから、語釈は「帰らずに」とすべきと考える。また、『土岐方言』の「かえろうと」という意味では、「かえらすと思ったに、引き止められた。」(＝帰ろうと思ったのに、引き止められた(例文・訳共に筆者)) のような場合に用いられる。語尾 - ス - トに否定 + 順接と意志 + 引用の 2 種類があるわけである。
- 9) ヒマエは使用した語彙集のうち『土岐方言』のみに掲載されており、「月経時をいう」との語釈があるが、「月経」のことかと思われる。佐藤監修 (2004) では月経の意でヒマエと言う地域に新潟県佐渡・三重県北牟婁郡・和歌山県西牟婁郡を挙げており、似た語形で近いところではヒマヤと言う長野県、ヒという岐阜県加茂郡などを挙げている。
- 10) 「蛙」は、共通語のカエルを基にすれば連母音 ae を持つことになるが、西濃地方や尾張地方のガイロを基にすれば連母音 ai を持つことになるので、連母音 ae が長音化することの典型的な例とは見做すことができない。
- 11) 『多治見方言』及び『土岐方言』においては、オ段 + ウの表記がオ段長音を示していると考えられる場合が多いが、このホロウの例は動詞であることから、他の動詞と同様に最後の音はウ段音であると考え、連母音 ou とした。
- 12) J. ロドリゲス (1603-04) 『日本大文典』には mōfaya (マウハヤ) の形が見られる。
- 13) 実際には、連母音の発音には音節構造に関わる音素配列上の問題だけではなく、アクセントも関わってくるのが考えられ、今回の面接調査の調査語もアクセントを考慮して選定しているが、これについてはアクセントについて整理したのちに検討したい。
- 14) ヤグウとは、構造物についてしっかりしていなくてぐらぐらするような様を表す形容詞である。
- 15) チョオダアスは意味的には「くださる」と対応する。音韻的に「頂戴」と対応する部分を持つが、意味およびチョオダアタ・チョオダアヘンカヤ等の活用の仕方から、イリヤアス「(1) 来ルの尊敬語、(2) 居ルの尊敬語」(イリヤアタ・イリヤアヘンカ)、シヤアス「スルの尊敬語」(シヤアタ・シヤアヘンカ) 等と同じ尊敬語の語尾形態素を持つ混成語 {チョウダイ} + {-jaRsu} と考えられる。
- 16) 芥子川 (1957: 29f) は鎌倉時代に瀬戸の陶器が始まり、江戸初期に土を求めて陶工が多治見に向かったのが多治見陶器の始まりとしているが、実際、瀬戸方面から多治見方面への陶工の移動があり、新たな技術が伝えられたにせよ、多治見近辺での製陶はすでに奈良時代から始まっていたことから、時代については誤解があると思われる。

参考文献

- 牛山初男 (1953) 「語法上より見たる東西方言の境界線について」『国語学』第 12 輯 pp. 59-62 国語学会編
- 太田有多子 (1979) 「尾張と東濃の境界地域における言語地理学的研究—連母音 [ai] の発音の分布—」『椋山女学園大学研究論集』10 号 pp. 35-48
- 奥村三雄 (1976) 『改訂増補 岐阜県方言の研究』大衆書房
- 金田一春彦 (1953) 「音韻」『日本方言学』東條操編, pp. 89-176 吉川弘文館
- 芥子川律治 (1957) 「愛知県方言における連母音の諸相 [ai], [oi], [ui] の音訛について」私家版
- 国立国語研究所編 (1966-74) 『日本言語地図』大蔵省印刷局

- 佐藤亮一監修 (2004)『標準語引き 日本方言辞典』小学館
- 柴田武 (1950)『文字と言葉』刀江書院
- 椋山女学園大学方言研究グループ (1979)『尾張と東濃の境界地域言語地図』椋山女学園大学文学部国文研究室
- 多治見ことば編集委員会編著 (1975)『多治見のことば』(第2版) 多治見市教育研究所
- 多治見青年会議所 (社) (1996)『多治見弁』(多治見市教員研究所・(社) 多治見青年会議所四拾周年記念事業として作成された方言語彙の番付表)
- 土屋千春 (多治見市教育研究所) (1957)『多治見を中心とした土岐方言集』多治見市教育研究所
- 平山輝男他編著 (1997)『日本のことばシリーズ 21 岐阜県のことば』明治書院
- 水谷修 (1960a)『名古屋アクセントの一特質 (前半)』『音声学会会報』102号
- 水谷修 (1960b)『名古屋アクセントの一特質 (後半)』『音声学会会報』103号
- 山口幸洋 (1984)『愛知・岐阜のアクセント (1)』『名古屋・方言研究会会報』1, pp. 7-19 名古屋方言研究会
- 山口幸洋 (2003)『日本語東京アクセントの成立』港の人